

花巻北高校 PTAトークセッション
未来の学校づくりメタファーワーク
 ～「理想の殿堂」をつくるために踏み出す第一歩～

1 日時

2017 年 4 月 22 日(土) 15:30～16:00

2 会場

JAIいわて花巻営農拠点センター

3 登壇者

＜花巻北高校関係者＞

○齋藤未衣花(花巻北高校 3 年生)

○清水頭聖子(保護者代表)

○川村圭司(花巻北高校職員)

＜ゲスト＞

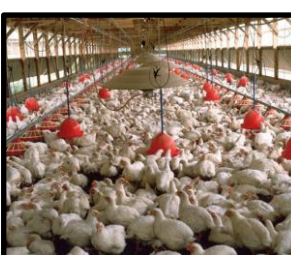
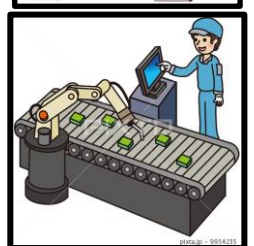
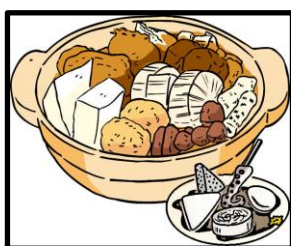
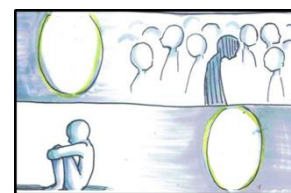
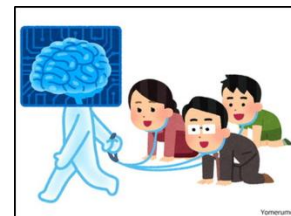
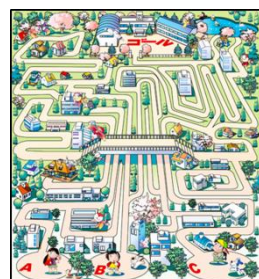
○才神敦子(八戸市在住・本日の講演会講師)

○ロナ・ラージス(高校生・妖精アーティスト)

進行 下町壽男(花巻北高校校長)

4 概要

以下のような 24 枚の絵を用意する。



【ワークA】（学校課題をあぶり出す）

- ① 24 枚の写真から、現在の花巻北高校、または、あなたの高校時代のイメージにあう写真を1枚選ぶ。
- ② なぜそれを選んだかをグループで共有する。
- ③ グループの意見を統合して1枚の選び、なぜそれを選んだかを話し合い、発表する。

【ワークB】（理想の学校像を共有する）

- ① 今度は自分が思う理想の学校を同じ写真群から1枚選ぶ。

以下、【A】の②③と同様に展開。

【ワークC】（課題解決の方策を模索する）

【A】で選んだ学校から【B】で選んだ学校に進むためにはどんなことをすればよいか、その初めの一手をグループでディスカッションし発表する。

※ 今回のワークの内容は、東京大学総合教育研究センター特任研究員の田中智輝氏からアイデアをいただいたものである。

5 ワークの実況

＜オープニング＞

下町:組織を改革するには「よそもの、わかもの、ばかもの」の存在が必要といわれます。ここでいう「ばかもの」とは、人から何を言われても自分の信じることを愚直にやり通す人のことです。未来志向なので回りの理解が得られず、時を経てからその人の価値が伝わったりしますね。でも、組織の「前例踏襲・例年通り」の文化を破壊し、イノベーションを生み出すには、そんな「ばかもの」や「よそもの」の存在が必要だと私は思います。

そういう意味で、今回は2人のよそもの（サマンサ・ロナ）と、2人のわかもの（高校生）を迎え、教師、保護者、生徒が共に学校の未来を語り合うというワークショップを企画しました。

ステージ上で5人がグループディスカッションを行います。同時に同じワークを会場の皆さんにも行っていただこうと思います。周囲の人と4人位のグループを作ってください。30分程のワークショップですが、皆さんと一緒にこれからの花巻北高校の姿を展望していきたいと思っています。

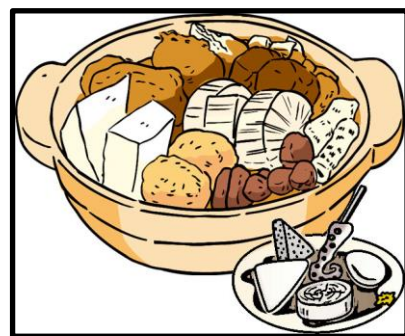
＜ワークA ①②＞

● 各メンバーが選んだ絵とその理由

才神:私はブロイラーの絵を選びました。私の高校時代は、なぜ勉強するかとか何を勉強するか一切考えず、とにかく高校に行けといわれたから行き、勉強しろと言われるから勉強し、進学しなさいといわれたから進学したというような状況でした。恐らくここにいる鶏たちも、なぜここにいるのか、これから先どうなるのかを自分で決められないまま生きていくのではないかと考え、この絵にしました。



清水頭:私はおでんの絵にしました。昔の花巻北高校は、服装も時間も、やることも自由な校風でした。部活に頑張る者、勉強に頑張る者、部活をサボる者、バンドを組んで盛り上がる者、応援歌練習に盛り上がる者、いろんな人たちがいました。みんなそれぞれ味があって、まとまるときはまとまり、花巻北高校と言う鍋の中で、ぐつぐつと盛り上がっていたような時代でした。



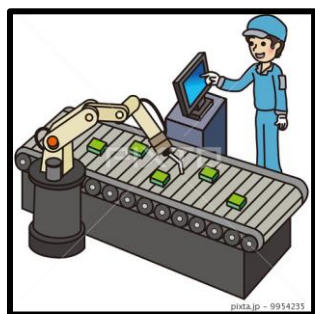
川村:私は「スタート」の絵を選びました。私は盛岡南高校の体育科の出身で、陸上競技をしていました。体育が大好きで、毎日「バカ」みたいに有り余るエネルギーをスポーツで発散していました。



齋藤:私は動物園の写真を選びました。私が花北に入って思うことは、同級生、先輩後輩、そして先生たちにも、個性的な人がいて面白いなあということです。でも動物園の動物たちは「檻」の中に入れられていますよね。私は、花北では、特に年上の人と学校の中で距離を感じることがあります。そこでこの絵にしました。



ロナ:私が選んだのはベルトコンベアの絵です。イメージとしては、ボタンを押している人が先生で、並んでいる製品が生徒です。つい先日、二者面談があって、私は進路として大学に進学しないことを選択しました。すると先生が、「大学に進まない道があるとは思いますが、それは大学に行って就職するという安定したレールがあるのに、わざわざそこから外れるということだよ」というようなことを言われました。そんなことがあったので、この絵を選びました。



<フロアの意見>

下町:では皆さんが選んだ絵をまとめる形で、グループとして1枚の絵を選んでもらいます。ステージの皆さんがまとめている間に、フロアの皆さんから意見を伺いたいと思います。



フロアの意見①(母親4人グループ)

私たちのグループでは「迷路の絵」を選びました。向こう側にゴールがあります。それは皆がそれぞれ持っている思いや夢です。そのゴールを目指す過程には多様な道があり、それを選択する自由があるような学校であればいいなあという思いを込めてこの一枚にしました。



フロアの意見②(父親4人グループ)

私たちのグループは、齋藤さんと同じ動物園の絵を選びました。私も花北のOBですが、当時は今より何十倍も個性的で「不思議な動物」がたくさんいました。今の子どもたちは仲がいいように見えます。昔も仲がよかったんだけど、「ちょうどいい距離感」を保っていました。今のこどもたちはちょうどいい距離感なのか、表面的な仲の良さなのかどうなのか微妙な気がします。



<ワーク A ③>

●5人の絵を総合して1つの絵を決める



齋藤:私たち5人で1つに決めた絵は「遊園地」です。遊園地ってというのは、誘導する人がいないと乗りたい乗り物にも乗れなかったりします。これは、先生たちに言われるままの生活(才神さんの意見)ということを示しています。そして、個性豊かな人がいて、おでんの具のように味があって面白いっていうのは(清水頭さんの意見)、様々な遊具や乗り物があるということに対応します。



あと、川村先生の「走ってた」っていうのは…。まあ、遊園地の中を走り回るのは楽しいですね(笑)。

この絵の中にもレールによって動いている乗り物がたくさんあります。これはロナさんの言った「レールに敷かれている」ということとつながります。私がいった、動物園の「個性的な人がいるけれどたまに壁を感じる」っていうのは、いろんな乗り物があるけれど、一つの乗り物に乗っている間に、他の乗り物に乗っている人たちは何をしているかがわ

からないということでもあると思います。

そういうわけで、5人の意見を取り入れて遊園地の絵になりました。

下町:こうやって5人で集まって話しをすると、一人では気づけないような考えがでてきますね。

では、次に、ワーク B の方に入ります。今は、現在の高校に対する良さだけではなく課題や問題点が出てきました。では、それを踏まえて、私たちはどんな学校にしたいかという、ビフォーアフターのアフターの方を考えてみようと思います。

<ワーク B ①②>

才神:私が選んだのは地球と子どもの絵です。子どもたちの個性や多様性を認めながら、手をつないでハーモニーを作って一つの学校をつくり上げていくというイメージでこの絵を選びました。



清水頭:私が選んだのはオーケストラの絵です。指揮者は今の花北でいうと下町校長先生。そして先生と生徒が一つずつ楽器を持って演奏しているというイメージです。楽器を演奏するっていうことは、練習をしなければなりません。一人一人が頑張るって練習することと、オーケストラとして成功させるには、そんな一人一人の力が「まとまって」ひとつの曲が奏でられるということです。



川村:私は、また笑われるかもしれませんが、トレーニングの絵を選びました(笑)。トレーニングには原理・原則があります。その一つが特異性の原理です。それは、トレーニングはその種類によって鍛えられる機能が異なるというものです。

例えば持久走ではパワーの向上は期待できませんし、スクワットでは上半身の筋力のトレーニングにはなり得ません。だから、まず目的があって、その目的に応じて、その種目を選ぶことが必要です。私が思う学校のイメージは、皆がそれぞれの目標に向かって、必要なところを正しく鍛える場であるということです。さらにそれが自主的なものであればなおよいと思います。



齋藤:私もトレーニングルームの絵にしました。ジムに行く人って、周りに頑張っている人がいるから、その環境に自分の身を置いて鍛えたいなあって思うのではないのでしょうか。そのように周りが頑張るから自分も頑張ろうと思えるような場が学校であればよいと思いこの絵を選びました。

ロナ:私は地球と子どもの絵にしました。私が最初に選んだベルトコンベアの絵は、レールの上にいることへの疑問でした。今の時代は、世界中インターネットでつながっていて、今ある仕事も将来どうなるかわからないし、レールなんていつ壊れるかわからないということではないかと思います。そのような中、日本という小さな国の小さな世界観で、レールなんていう意識を持たないで、もっと世界を見て、世界の人達とつながって、新しい挑戦をしてい

けるような環境が学校の中にあればよいという思いからこの絵にしました。

<フロアの意見>

下町:大変素晴らしい意見でしたね。この後にフロアから意見を聞くのは、少しハードルが高いかな(笑)。ここで、今年赴任された本校の副校長の意見を伺うことにしましょう。千葉副校長お願いします。



千葉:私はオーケストラの絵にしました。昔のオーケストラは指揮者の存在がとても大きく、一人で頑張りまわりをひっぱたいて導いていたんですが、今は違いますね。指揮者も演奏者仲間の一人であるということです。それから、オーケストラは個々が練習することはもちろんですが、互いに他の音を聴いて、そしてアンサンブルしないといけません。これは対話を意味することでもあります。それでオーケストラの絵にしました。

<ワーク B③からワーク C>

下町:では、最後に、グループで理想の学校の絵を1つに絞って、そのような学校を築くために、具体的にどんなことをすればよいか、その最初の一手を考えてもらいたいと思います。



ロナ: 私たちが絞り込んだ絵は「トレーニングルーム」です。周りを見て高めあうこと、そして自分の目標を持って、更に高いところを目指す場が理想の学校であると考えました。

そして、その理想の学校の実現のための最初の一手は、「知る」ということにしました。

「知る」というのは、自分の今の状態を知る、自分はどれだけ小さい世界で生きてきたかを知る、周りではどれだけ大きな変化が起こっているのかを知る、もしくは自分の好きなことは何かを知る、などがあると思います。

私はよそのものだからいっちゃいますけど、私は、今は好きなことを仕事にできる時代だと思っているんですね。情報も科学も発達して、人間がやっている仕事はどんどん機械にとって代わられるかもしれない。そんな中、じゃあ人間は何をしていけばいいかと思った時、やっぱり好きなことをしていった方がいいんじゃないかと思うんです。だから、学校なんてこの次で、好きなことを好きな分だけやれるのが今のこの時期だと思うんです。そうやっていけば、それを仕事とつなげられる、そういう時代が来ると思うんです。だから、まずは、好きなことをわかっている人はその好きなことをやる、でも、それが無い人は自分の好きなことが何かを知る、ということが最初の一手だと思いました。



下町: なるほど。知るがキーワードということですね。「自分を知る」「世界を知る」「他者を知る」知るにはいろいろありますね。

では少し突っ込ませてもらいます。その「知る」ためには、私たちはどのようなことをすればいいと思いますか。どなたか考えを聞かせてください。

齋藤: 私は、「知る」ためには自分の現状に反発してみることもいいのかなと思います。私はこれから受験生として勉強を頑張らなければならない年です。でも、本当にやりたいことはあるのだろうか、と勉強から離れて自分を見つめてみることで、周りの大人に言われることばかり信じないで、自分が本当に行きたい大学はどこなのか考えてみるとか、そういう、反発する心を持つのも、「知る」ための一歩になるのではないかと思います。

下町: ありがとうございます。2人の高校生の意見を聞いて、学校代表として川村先生どう思いますか(笑)?

川村: 言葉がでません…(笑)。私の場合はミスばかりしているんですが、トライすることが「知る」ことにつながるのかなあとと思います。

下町: うまくまとめていただいてありがとうございます(笑)。

学校とは、安全に失敗できる場所でもありますね。だからトライ&エラーを繰り返し、失敗を恐れずにチャレンジしていくということが「知る」につながる一歩なのかもしれませんね。

今日は短い時間でしたが、高校生の2人が入ってくれたおかげで、活発なワークショップができました。ありがとうございました。フロアの皆さんも今日は本当にありがとうございました。

(2017年4月30日 文責 下町壽男)

2017年4月22日(土) 花巻北高等学校PTA総会 ワークショップ

未来の学校づくりメタファーワーク

保護者・教員・生徒がともに語り合う「私たちの理想の殿堂」



今回のワークの実施にあたっては、東京大学総合教育研究センター特任研究員の田中智輝氏よりアイデアをいただきました。